

# 田中純先生のご逝去を悼んで

峯村 操

田中純先生は、6年半の闘病の末、2013年3月22日、天に召されました。

休暇先の長野で腸に大きなガンが発見され、直ちに手術を受けられたのは2006年の夏のことでした。発見がもう少し遅ければ、すぐにも命を落としかねないほどだったそうです。術後は順調に快復され、大学にも復帰、周りも胸を撫で下ろしていました。

それから2年ほど後だったでしょうか、肝臓への転移が認められ、週末に病院に通って苦しい治療を受ける日々が始まりました。抗がん剤の影響で、ピアノを弾く手が真っ黒になっていることもあり、辛そうなお様子が見てとれたので、我々は休養をとるよう強く勧めました。しかし彼は「学生たちのために授業だけは休まない、大学で授業をしている方が苦しさを忘れられる」と頑として聞き入れず、レッスンを続けられたのでした。様々な治療を試みておられたようですが、病魔は深く彼の体に巣食い、制圧することは困難でした。いつのことだったでしょうか、「自分のガンは消えない、ガンと共に生きていくしかないんだ」と、私にボソッと漏らしたこともありました。かける言葉がありませんでした。

そんな悪性のガンに侵されながら、さらに数年、命を保ち続けたことができたのは、お若い頃にスポーツで培った体力があったためでしょうか。医師たちですら、驚嘆していたと聞いています。

しかしながら、ガンの進行は止まらず、他の部位にも転移が始まって、昨年(2012年)7月より、ついに休職せざるを得なくなりました。その後のご容態は仄聞するのみでしたが、個人的にもお見舞いに伺うことが叶わなかったので、時折メールでご様子を伺っておりました。昨年10月ごろ、「5号館前の金木犀が香る頃となりました」と書いた私のメールに「学生たちとのことを思い出すよ。泣かせるじゃないか」と、ユーモアまじりに返信が来て、しかし、それももう見ることはできないのだと暗に仰られているのが感じられて、何ともいえぬ気持ちになったのを覚えています。

ご存知の通りの巨軀さながらの、心の広い方でした。どのようなことにも「大丈夫」と動じないところを見せ、そのご様子は多くの学生たちを、そして時には私たちをも包み込んでくれるような懐の大きさや温かさを感じさせました。彼が声を荒げたところなど、ただの一度も見たことはありません。しかし同時に人一倍細やかなお心もち、学生が沈んでいる様子をいち早く感じ取ってじっくりと話を聞き、励ましている御姿もしばしば拝見し、学生たちからの多大な信頼がこういうところから生まれるんだと感じ入ったものでした。5月のお別れの会や9月の追悼のコンサートに、きわめてたくさんの卒業生が訪れたことがその何よりもの証です。

心から音楽を愛する方でした。ピアノは本来一人で演奏することの多い楽器ですが、彼の得意とするところは4手連弾、つまり1台のピアノを二人の奏者で演奏する形態でした。

それは独奏と違い、自分ひとりの解釈や感覚で弾いていくことは決して出来ないものなのです。自分のことだけでなく、常に相手の呼吸を感じ取り、相手の音を聴き、相手の表現を尊重しなくてはなりません。思えばそれは、他者に対する思いやり・気遣いに溢れる彼の性格に最も似つかわしいものでした。演奏にもおおらかさと繊細さが同居していました。彼が驚くほど長く病と闘い続けることができたのは、他でもない、音楽の力があつたから、音楽を心から愛し続けるお気持ちがあつたからだとは私は信じています。

今ごろ天国で大好きな音楽を存分に楽しんでおられることと思います。心よりご冥福をお祈りします。純先生、ありがとうございました。

(みねむら みさお 文教大学教育学部学校教育課程音楽専修)